



第27回全国高等学校駅伝競走大会、東京都予選第6区は、近年稀に見ぬデットヒートで、喚声に包まれていた。

これまで1区から6区までの間に何度も順位が入れ替わり、互いに一步も譲らぬ状態でここまできている。

当然、観戦する側にもつい熱が入ってしまう。  
第6区も残り3キロ。

トップと2位の差はわずか10秒といったところだろう。1位の高校だけが京都都大路で開催される全国大会の出場権を獲得できるため、そのわずかな差は両チームにとって天国と地獄ほどの開きがあった。

残す区間はアンカーの7区のみ。距離にしてたった5キロメートルで勝敗を決してしまう。

それでも10秒という差はまだ逆転可能なタイムだった。

ウォーミングアップに集中していた旭日川高校の3年生、アンカーの武藤昇は自分の前を通過していく両チームの選手を見つめていた。

黒生地に金色で「海王高校」とプリントされた背中の中の文字を昇の高校であるブルーのユニホームが必死に追いかけていく。

体の両脇のラインに沿って、オレンジと白の線が螺旋状に絡み合い、胸には銀字で「旭日川高校」と書かている。

「木下、ファイト！」

昇は思わず、チームメイトを大声で応援してしまう。  
彼らが折り返し地点をまわって、昇のところに戻ってくるまであと10分もない。

1位の海王高校と続く2位の旭日川高校は、どちらも毎年優勝候補に挙げられながら未だにその経験はなく、どちらが優勝しても初の全国出場だった。

「先輩、準備はOKですか？」

付き添いの後輩、江藤優はペットボトルを昇に差し出しながら尋ねた。  
昇はすぐに返答はせず、ペットボトルを黙って受け取ると、わずかに水を含み、数回にわたってゆっくりと飲み干す。

緊張で乾いたのどを潤してから、笑顔で優の問いに対して応えた。

「ああ、ばっちりだよ。そろそろスタート地点に移動しておかないとな」

試合直前はピリピリする選手も多く、付き添いの者が様子を聞くなんてことはめったにしないのだが、優が気軽に尋ねられるほど、昇は平常心に見えた。

昇は、ベンチコートのボタンをバチバチと音を立てながら勢いよくはずして脱ぎ、優に手渡した

。姿を現すのを待っていたかのように、ユニホームが輝いてみえた。

「付き添いありがとね。おかげでレースに集中できたよ。みんなで都路いこうな」  
「はい！先輩なら絶対大丈夫ですよ。この3年間、誰よりも努力したんですから」

こんな大舞台であるにもかかわらず、緊張するどころかむしろ楽しんでいる先輩を優は憧れと尊敬の念を込めて見つめていた。自分だったら、とうにプレッシャーに押しつぶされていただろう。

7区のスタート付近には、海王高校3年生アンカーの早川大地がすでにスタンバイしていた。お互いに目を合わせたが、すでに自分の世界に入り込んでいるため、彼らはにらみ合うこともなく、いつ召集がかかってもいいように黙々と身体を動かしている。

「海王高校、旭日川高校の選手はスタート位置についてください」

係員の合図で2人はスタートラインへと進む。  
昇は目を閉じ、鼓動に耳を傾け、いつもより速く唸りだした心拍を抑え込んだ。

絶対勝てる、おまえはあんなに努力してきたじゃないか、と自分に言い聞かせ、高鳴る心音をなだめつかせた。  
トップの選手が近づいてくると辺りは騒然としてくる。

「木下、ラスト!!!」

昇は、片手をあげて自分のチームメイトに呼び掛ける。  
……その横で早川大地はたすきを受け取り、猛然と走り去っていった。

「ごめん昇、追いぬけなかった。あとは任せた」

たすきを渡される瞬間に背中をポンっとたたかれる。  
受け取ったたすきは6人分の汗をびっしょりと吸い込み、まるで全員の魂がつまっているかのように重かった。昇はその重さをかみしめるように、ぎゅっとにぎりしめてから肩にかける。

1位はほんの数メートル前を走っている。  
ほんの目と鼻の先だ。

早川は中学生の頃から注目され、5000メートルの持ちタイムは昇より速く、都内トップクラスの14分47秒。高校1年生の時には、全国大会に出場できるほどのレベルだった。

そんな選手をエース区間の1区や次に距離の長い3・4区で器用しなかったのは、海王高校の監督のカケだったといっても過言ではない。

このまま海王高校が順調に逃げ切れれば、監督の采配が功を称したということになる。  
一方、昇はまったくの無名であり、今年の秋になってようやく才能が開花してきた選手で未だに15分の壁すら越えていなかった。  
経験者からの目からみれば、逆転は最早ほぼ不可能だろう。

昇はたすきを肩にかけ終わるとしっかりと前を見据えた。  
ダッシュすればすぐに追いつける距離しかない。

(おちつけ、おちつけ)

昇はそう呪文のように反復した。

## 1km

---

駅伝では、1区以外はまわりに競う相手がいないため、1キロの入りが大事で相手が手の届きそうな位置にいるからといって、ペースを上げてしまえばあとで崩壊してしまう可能性が高い。

逆にトップはここで突き放しにかかってしまえば、相手の心を折ることができるので、オーバーペースぎみで入っているだろう。それが駅伝のセオリーである。

(始めの1キロまでは、冷静にいけ)

身体はアドレナリンでほてっているのに、昇の頭は波のない海のように静けさを保っていた。

昇は、決してスピードがある選手ではなく、長距離になればなるほど力を発揮するタイプだ。だからこそ後半に失速してしまうと、ラストスパートだけで追い上げられる可能性は皆無である。

ましてや早川はスプリンターだ。彼は5000メートルでも有名だが、もともとは1500メートル出身の選手であり、都大会の優勝経験はそちらのほうが多く、スピードにも自信があるだろう。

昇は圧倒的不利な状況だった。

だが、昇には一つだけ有利なことがある。それは地の利だった。

この都駅伝コースの歴史は新しく、去年から使われ始めたもので、旭日川高校からわずか3キロメートル程度しか離れていない。

そのため、彼ら選手は夏が終わると、このコースで練習をすることが多く、どの高校よりも実際に走りこんでいる。それだけではない。昇は旭川高校の選手の中で誰よりも熟知している。それもそのはず、このコースを作ったのは、他の誰でもない彼だったからだ。

この駅伝コースが作られるよう指示されたとき、昇はケガのため、まったく走ることができず、練習のできなかった彼とマネージャーとで協力して完成させたコースだった。

自分一人が走れない。その屈辱は、生半かなものではなかったに違いない。

## ――努力は実らない

---

―― 一年生の時、昇は誰よりも遅いタイムで入部した。当時の5000メートルのタイムは19分12秒と、トップの選手に周回遅れをされてしまうほどの屈辱的な結果だった。

毎年都内優勝候補だけあって練習内容はきびしく、常に一番遅いグループのCチームで練習をし続け、同世代の部員からほとんど相手にされていなかった。

やめていく部員も少なくなく、彼より速かった選手はどんどん去っていき、20人いた同世代の部員は今では、わずか5人しか残っていない。昇自信、何度も何度もやめようと思っていた。それでも彼は走り続けてきた。

(努力すれば、かならず追いつける！)

それが彼の支えだった。次第に体力もつき、2年生になる頃にはCチームとはいえ、常に先頭をひっぱり、ペースをつくれるほどの強さを身につけていた。練習中にチームから離れていく後輩をみれば、一緒に隣を走り、背中を押してやる。

当然、自分もチームから離れてしまうのだが、後輩が練習から脱落してからきちんと集団に追いつき、最後まで走り抜いてしまうのである。

一定のペースで走れない分、練習がきつくなるのだが、どれだけ脱落者が出ようとも、昇は後輩を励ますことをやめなかった。

「人に負けてもいいけど、自分にだけは負けるなよ」

そう自分に言い聞かせるように、後輩に激を飛ばした。そんな後輩想いの昇はひそかに彼らから慕われていくのだった。

昇はそんなことは露知らずに、とにかく愚直に努力していく。

練習後は、人よりも長くジョギングを行い、さらには自分のスピードのなさを痛快していた昇は、人に隠れて坂道ダッシュを行い、弱点を補っていた。秋の大会でみるみるうちに夏の練習の成果は表れ、タイムトライアルの度に自己記録を更新して、昇はやればやった分だけ速くなれる気がしていたのだ。

しかし、それも長くは続かなかった。残酷なまでに彼は打ちのめされてしまう出来事が待っていた。

もともと筋力があつたわけでない彼の身体はオーバーワークに悲鳴を上げ、走れなくなるほどの激痛が膝に走り、ついにドクターストップがかかってしまったのだ。ようやく日の目を見られる、と勢いづいた矢先ただだけに、昇が失意のどん底へと落されてしまうのは仕方がないことだった――。

## 2km

---

1キロメートル通過。

手元の時計で、2分55秒。

タスキをもらう直前から測定しているため、わずかな誤差はあるだろうが、昇が想定していたとおりのまづまづのタイムだ。

幾度となく練習で身体に沁み込ませたペースは、一切時計を見なくても細胞が覚えきっていた。

やはり、調子がいいらしい。

自分のイメージ通りのタイムで1キロメートルを通過した時には、必ずベストタイムを更新する傾向がある。

5キロメートルを1キロメートルごとに逆算して、自分のペースを調整する、という行為はある程度のランナーであれば、誰にでもできることだが、一人で走り切る駅伝はその1キロメートル単位のペース感覚が正確な者ほど強い。

その点、練習でチームをひっぱり続けた昇は、身体の手触りが鋭く磨かれている。

トラックフィールドよりも、駅伝向きなのだ。

昇の右手にゴール地点が見えた。

折り返し地点をターンして、ここまで戻ってくれば、この42,195キロメートルの駅伝は終着を迎えるのである。

(自分の走りをすれば負けない、ぜってえ一抜いて帰ってきてやる)

さすがにゴール付近ともあって一番声援も多く、昇に力を与えてくれる。

「旭日川高校、ファイトー——」

「のぼる——、そのままそのまま。今12秒差。いけるぞ！」

やはり、早川との差はひらいているらしい。

もう我慢の必要はない。

目はまっすぐ前を見据え、視線が早川だけを捉えると、これまで抑え込んでいた気持ちを起爆剤として、身体にぶつけてやった。

リミッターを外し、1段ギアを上げる。

走ることにだけ研ぎ澄まされた集中力は、周りの声援すらもノイズへ変わっていく。

視界も狭まり、次々に景色だけが流れていった。

この世界から隔離され、自分だけが別世界にいるような開放感がたまらない。

苦しいはずの昇の表情から、笑みがもれ出していった。

## ――決意

---

――監督とコーチに退部の意思を告げた昇は、二人に説得され続けたが、堅くなに断った。

(才能がないやつがいくら頑張ったって無駄だろ)

チームの士気に影響するため、全部員に伝えるのはコースが完成してからということになった。

部長と昇の代の次期部長の敦志にだけ、その旨が告げられた。部長は立場上、昇を“セットク”してみたが決意の固まった昇には、脈拍のないトーンでは、時間の無駄である。

同世代の中で一番仲の良い敦志は、「そうか」と一言だけつぶやき、一切止めなかった。それが彼なりの友の印なのだろう。

引き止めるという行為は、彼より速い敦志がしたところで昇のプライドを傷つけることにしかない、というのを知っているからこそその行動だろう。

そして、やめるわけをああだ、こうだ聞かない。  
気配りができる男なのだ。  
ただいつものように二人だけで話しながら、帰った。

「おまえが下のチームをまとめて、引っ張ってくると思ってたのにあ」

と別れ際に一言だけつぶやいて昇の前から去っていった。

その言葉が昇の心に妙に浸透していく。  
チームに必要なない者、そう思っていただけに敦志がつぶやいた言霊によって、昇によりどころができてしまったのだった。

次の日、普段はおしゃべりや寝ていることの多い授業も、ただぼんやりと秋晴れの空を見つめながらその言葉だけがリピートされていた。

その日の練習は、各自ジョック。  
60分間、疲労抜きのために好きなペースでジョギングをする内容だった。

昇はいつものように荒川の河川敷に自転車で向かい、ただぼーっとコースづくりをつづけていた。昨日までに5区まで作り終え、6区もおそらく今日中に終わるだろう。  
あと数日で自分の選手生命に終止符をうつ。  
まるで昇はアンカーのような心持で、コースづくりに打ち込んでいた。――



## 2.5km

---

ペースを切り替え、早川の前に出た。  
一気に視界が広がる。  
折り返し地点、その先の笹目橋まで見渡せ、はるか荒川の上流まで上っていけるような爽快な気分には鼻は包み込まれた。

前に誰もいない、たったそれだけでまったく景色が変わってみえることに鼻は驚いた。ハアハア、とさきほどまではまったく聞こえてこなかった、早川の荒れた息づかいまでが耳に入ってくる。

はじめの200メートルほどは、ぴったりと影のごとく鼻にくっついてきた早川もオーバーペースと判断したのか、ついていけなくなったのかはわからないが次第に離れていった。

ラスト2.3キロメートル。  
ここから残りの区間、どれだけこのハイペースを維持できるか、明暗が別れる。  
5000メートルの中でもっともつらい時間帯だ。  
鼻の腕の位置がいつもより数センチだけ下がる。

本当に自分を追い込んだ時にだけ、身体が一番楽な姿勢で走ろうと、勝手に修正してくれる。腿には乳酸が溜まり、足は動かなくなっているはずだが、アドレナリンが鼻の細胞を突き動かして、どんどんペースが上がっていく。

それに合わせるようにして、鼻の呼吸は独特のリズムを打ちだした。  
ハアッハアッフー、ハアッハアッフー、ツハ、ツハ。

身体中、酸素を欲すればほっするほど、不思議と鼻は息を吸うよりも吐く回数のほうが多くなる。過呼吸にならないよう、無意識に行っているのだ。

これだけハイペースを維持しても、油断は禁物だった。  
よほどのアクシデントがないかぎり、あれだけで早川の心が折れたとは思えない。

きっと早川のことだ、折り返し地点をすぎた辺りからじわじわとスピードを上げて、ラスト1キロメートルでいっきに仕掛けてくるだろう。  
その時までには鼻がどれだけ早川を引き離しているか、それが問題だった。

体力さえ削っておけば、仮に追い抜かれても鼻のスピードでもぎりぎり巻き返せるはずだ。  
鼻は時計を見ることをやめ、ただ前を見据えて走り出した。

## ――逃げる

---

――あと少しでコースづくりも終わり、自分も退部する。

(才能のない人間は努力したって、ある程度のレベルまでしかいけないんだ。それだったら、努力しないほうがラクだ)

昇は自分を納得させるように答えを導き出した。

(なあなあに生きて、適当に過ごす。足掻くだけ無駄さ)

一人で黙々とつづけるこの作業は、思考パターンの不のスパイラルしか生み出さない。退部したからといってとりわけなんの取り柄のない昇には、輝かしい未来が待っているわけでもない。他のスポーツや勉強、何をやらせても真ん中の昇が唯一夢中になれ、周りの人より秀抜できたのが長距離だった。

それなのに、卓越した者たちによって、叩きのめされてしまったのだ。自分はダメな人間なんだ、と勝手にレッテルを張りつけた。

「先輩！ やめるってほんとうですか？」

昇の背後でザザッと足音が止み、声をかけられたことでようやく彼は気がついた。振り向くとCチームの後輩たちがそこに立っていた。さきほどまでは、てっきりみんなでジョッグしているのか、と昇は思って気にもとめずにいたのだが、それだけではなかったらしい。

立っているメンバーは、昇に一度は背中を練習中に押された者たちだろう。部全体の雰囲気は、遅い者と速い者で自然と分断されるのだが、その中間に位置している人物が昇だからこそ、退部されてはみなが不安なのだ。

「俺らは、先輩に憧れてここまできたのに、なんでこんなところであきらめちゃうんっすか。先輩がやめたら誰がこの部を引っ張っていくんすか！」

返答に沈黙している昇に堪え切れなくなったのか、さきほどまでうつむいていたチームでお荷物とされている後輩、江藤優が重い口を開いた。

「先輩、逃げるんですか？ 自分から」

それは昇が後輩たちに伝え続けたメッセージだった。

「誰に負けたっていいが、自分にだけは負けるな。そしたら、絶対、強い選手になれるから」

何度もやめたい、と昇に相談していた江藤だからこそ、出た言葉だったのだろう。だからこそ、昇の心へストレートに届いてしまった。

昇は思わず、苦笑してしまう。  
昇はその場で目をつぶり、拳を軽く握り、あごにそれをあてて考え込んだ。  
いや、考え込むフリをした。  
目を開けた時には、瞳に再び火が灯っていた。

「ここでやめたら、オレは馬鹿だな。しっかしよ～、俺についてきたってロクなことないぞ」

退部宣言の撤回を監督に報告してから帰ってくると、敦志がニヤリと笑みをこぼした。

(このやろう、後輩に退部の件を教えたのは、おまえか)

昇の思考を読んだのか、  
「おまえの人氣がなきゃ、教えたところでこうはならなかったさ」  
と笑みをこぼした。

そうして再び、いやこれまで以上の努力の日々に戻り、昇は最後の年でようやくアンカーとして選出されたのだった。  
7区はそういうリスタートをきったコースだけに人一倍思い入れが激しい。  
何度もイメージトレーニングをした区間だったのだ。――

## 折り返し地点

---

折り返し地点。

残り2キロメートル。

そこでようやく昇は、早川の位置を肉眼ではっきりと確認することができた。

(もうこんなにも離れていたのか)

その差は、6,7メートルぐらいだろうか。

すれ違いざまに2人は目があった。

相手に疲れを読みとらせてはいけないと、その時だけはお互いにツライ表情を押し隠す。疲労感を相手に悟られるだけで、心に余裕を与えてしまい、それだけ有利になってしまう。

この切迫した状態では、ちょっとしたメンタルの差が大きな勝敗をわけてしまうのだ。

きつい。

次第に昇の視野が霧に包まれるように狭まっていく。

身体は全身が水に浸かったように重く、昇のあごが徐々に上がり始めた。

(ここで踏ん張らないと。きついのは相手も同じだ)

ハアハア。

身体は硬直しだして、どんなに動かそうとしても、思いっきり大地を蹴りあげられなくなっていった。

(動け、動け、きついのはわかってるよ。でもここでペースを落としたらやばいだろう。頼む、あとちょっとしかないんだから、ふんばれよ！ぶっこわれてもいいから)

昇は自分に活を入れ、懸命にペースを上げようとしているのに、周り人たちから見ればあきらかに失速しているのがわかってしまう。

「昇、ファット！」

「ここがふんばりどきだぞ」

周りの懸命の声さえも彼の元には届かない。

(負けてたまるか、やっとこの舞台に立てたんだ)

(疲れただろう？もう、休めよ)

(あと少しじゃないか、踏ん張らなきゃ)

(負けてもおまえのせいじゃない)

二つの精神がせめぎ合い、昇の視界は完全にコースすらも見えなくなって、白銀世界に包まれた。

ひたすら自分のとの戦い。

ここで足を止めてしまえば、どれほどラクに慣れるだろう。

残り1キロメートルをきった。

3分以内の間に、すべて決まってしまう。100メートル、17,8秒のペースをここまで維持してきている二人の身体の限界は近い。ほぼダッシュで4キロメートルを走っている彼らの本能は、身体の崩壊を恐れ、休もうとする。

(つらい)

そんな言葉しか出てこない。  
その時だった。  
猛烈な風が昇の横をすり抜けた。

早川大地だった。  
彼はラスト1,500メートルになった時点でペースを切り替え、一気に追いついてきたのだ。

(や・ば・い、抜かれた)

それでも昇の身体は動いてくれない。  
「スピードあげろ」という脳の信号は、もはやこの肉体には行き届かず、手足だけが「走れ」という過去の指令を必死に守って、身体が止まらないようにしているだけだった。

早川は振り向きもせず、昇を置き去りにしていった。

(このまま負けるのはいやだ！)  
(オレはまだ走れる。自分にもあいつにも負けられない)

「あゝ おおおおおおおおおおおあああ—————」

昇は叫んだ！  
叫ぶだけで体力は削られ、相手にも復活したことがバレてしまう。バカげた好意だ、とランナーなら笑うだろう。

だが、そうでもして身体に鞭を入れない限り、限界を超えて早川に追い付くことなんてできなかったのだ。  
視界が戻り、早川の背中を捉えた。

「昇、絶対追い抜け！」

チームメイトの声援が届く。  
身体の奥底から力が湧きだす。  
残り400メートルで昇は再び早川と並ぶ。

互いに隣を一切見ることはなく、ただひたすらゴールだけを見据えて腕を振る。  
辺りは二人の気迫に吞まれてしまい、声援を送ることすら忘れ、彼らの足跡と息づかいだけが響き渡る。

二人の争いはラスト100メートルをきった。  
彼らはまるで今までがウォーミングアップで、これから100メートル走を始めるんだ、と主張するかのように、二人は同時に全速力へ切り替えた。  
昇は、動かない足を動かすために、腕だけを懸命に振り上げ、ただガムシャラに走った、その長いながい100メートルを。  
呼吸すら忘れていた。

が、隣で並走しているはずの早川が少しずつ昇の視界に現れ、ついにはその背中が離れていく……。  
ほんの1メートル手前で、彼がゴールテープを切る瞬間が目に焼きついてしまった。

完走した昇はその場で、倒れ込んだ。  
ランナーは普通、完走しても倒れ込むことはない。昇もそれほど身体を消耗したわけではなく、ただ悔しくてそこに立っていられなかったのだ。

「うああああ―――」  
「はああ、はああ―――」

荒れた息のせいで声にもならないかすれ声で、昇はその場で泣き崩れてしまった。けっして人前に泣いたことがないプライドの高い昇が、人目を気にせず涙を見せている。

コーチがベンチコートをかぶせ、そこから動かそうとするが昇は微動にしなかった。キャプテンの敦志がやってきて、二人掛かりで無理やり立ち上がらせ、肩を貸しながらよろよろとチームの待機場所へと運ぶ。

それでもまたシートの上に倒れ込んでうずくまり、ベンチコートのフードを深くかぶって、大声で泣き続けた。彼のくやしさはついにチーム全体へ伝わり、今まで我慢していた者たちも泣き崩れてしまう。走った者も走れなかった者も。ただくやしい。純粋な思いからの皆の涙だった。

あとでわかったことだが、5000メートルのタイムは昇のベストタイムだった。14分47秒の区間賞。それでも、彼は届かなかった。

さすがに他の選手は涙が止まったものの、誰ひとり口をひらくことはなく、そんな中に一人、昇の鼻をすする音だけが彼らの心に直接響いてきてしまう。昇の涙は拭われることもない。ただ静かに地面に落ち続けている。

止めようにも、ゴールテープをきる早川の背中が目に焼きついて、何度もフラッシュバックしてしまう。昇は木陰に座り込み、ベンチコートのフードを持ったまま顔を見せようともしない。ミーティングの予定時間はとうに過ぎているはずなのに、その涙を止めようというものは誰一人いなかった。全力を出して戦い切り、それでも敗者になってしまった……。かけることばが見つからないのだ。

## 一つの答え

---

いつのまに空が夕焼けに変わり始めている。  
日が暮れる前には、全チームがゴールして閉会式が行われるだろう。

「おい、いつまでシケたツラしてるんだよ！ オレらがシャキっとしないと、後輩も困るんだから。いいかげん、ミーティングするぞ」

沈黙を破った張りのある声に、誰もがその主に振りかえった。  
それは昇だった。  
一番くやしかったはずの昇が腕で涙をふきながら、チームメイトに激を飛ばしたのだった。

「集合！」

キャプテンの声を合図に、みなが一つの輪になった。

――ミーティングは一人ひとり選手がコメントを残していく決まりになっている。最後はアンカーの昇の番だ。

「ほんとゴメン。オレがトップで帰ってくる約束、果たせなかった」

そうって、彼は深々と頭を下げた。  
その姿に後輩やコーチ、監督までも魅せられて、一度は止めたはずの涙が再び溢れてしまった。  
彼は一度、夕焼けを見上げて、みんなが泣き止むのを待ってから、ゆっくりと力強く語り始めた。

「オレは、この駅伝メンバーの中で……、いやチームの中で誰よりも才能ないと思います。人の倍以上の努力が必要でした。今まで何度やめようと思ったか。その都度みなさんに励まされて、ようやくこの舞台に立てることができました。本当に感謝しています」

昇は焰のついた目で一人ひとりに見つめるように話をつづける。

「今日の結果のように努力をしたって、必ずしも成功するとは限りません。でもこれだけはいえます。努力をしなければ、人は前に進むことはできないんです。きっと誰かのせいにして毎日過ごして、心が廃れていくでしょう。

自分は今日をもって引退しますが、みなさんは必ず来年こそは全国に行ってくれると信じています。自分はめっちゃめっちゃ悔いが残っていますが、それを糧に変えて別の舞台で、これからも報われるかわからない努力をしていこうと思います。だから、みなさんも自分だけには絶対負けな

そういい終えた彼の表情は凜としていた。

## 駆け抜けた日々

<http://p.booklog.jp/book/69156>

著者：柳生龍/木タ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yagyuryou/profile>

ブログ

<http://ameblo.jp/yagyuryou/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69156>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69156>